

「蓮の香」研究授業の実践報告

——「現代国語」と明治期の作品についての所感——

野 井 登

一 まえがき

二 授業目標・教材観

三 指導の方法と過程

四 反省及び「現代国語」としての所感

一 まえがき

本稿は去る昭和三十七年六月末、本校において「教育研究会」を開催した時の、私のつたない研究授業についての概略的な記録である。月日の経過した今日、どこまで血を通して再録しうるかはなはだ疑問ではあるが、ご批判いただければと思う。

二 授業目標・教材観

指導案から摘記すると、

(一) 日時 昭和三十七年六月二十八日(木)

第二時限(一〇、〇〇—一〇、五〇)

(二) 学級 大阪学芸大学附属高等学校天王寺校舎 第一学年A組

(男三四名、女一五名)

(三) 場所 (省略)

(四) 主題 文章の流れ

(五) 目標

イ 文語文とその読解に必要な文語のまじりのいずれも初歩的なものを学ばせる

ロ 明治時代の随想文芸における、文体と各作家の文章表現のスタイルの特色を理解し認識させる

ハ 文体の相違に伴う明治時代の文学理念、作品の歴史性の概略を学ばせる

ニ 現代各方面で使用されている文章・文体について考えさせ、その将来性についても、一応関心を持たせる

（丙）指導計画

	学 習 内 容	時間配当
第一次	文語文	1
第二次	小園の記	2
第三次	夏から秋へ	2
第四次	蓮の香（本次はこれの第一）	2
第五次	武藏野	2

（戊）本時の指導

イ 題材 蓮の香（樋口一葉）

ロ 目標

- （イ）読み方になれさせ、文体や内容に親しみを持たせる
- （ロ）擬古文体である文語文の美しさを味わい、言語感覚をみがかせる
- （ハ）説明に役だつことばの意味や文語のきまりを押え、解説の基礎能力を養わせる
- （ニ）部分的ではあるが、作者の生活をつかませ、「生きる」という徹底的な事実について経験する永遠的問題をふくんでい

（ハ）準備

教科書（大修館版 新高等国語 新訂版一）とプリント一枚
 （教材及びプリントは左のとおりである）

（教材）

蓮の香

樋口一葉

明治二十四年八月八日

早朝、師の君より手紙来る。一兩日は陽カタルにて腹痛たへがたければ、今日一會休むべきよしなりけり。依頼のゆかたもできあがりたるをもて、ただちに見舞に行く。さしてのことにもあらずと言ふ。また緋入れを仕立てくれよと一枚たのまる。帰宅せしは九時ごろなりしかば、これより図書館へ行かばやとて出づ。空は一点の雲なくて、焼くやうなる太陽の光、煙かとみゆる大路の砂ほこりなど、暑しとも喜し。大学をぬけて池の端に出づ。茅町のほとりより蓮の清香遠くかをりて、こちもすがすがしくなりぬ。「ひろごりたるはにくし。」と清少納言がいひけん夏の柳、岸になびくかげもせずしく、まして水の面みえぬばかり咲きみちたる紅白の蓮、明け渡る風に葉うらのかえりて見ゆるもをかし。蓮根取りの舟つなぎたる、これのみはあらずもがなと思ふ。競馬の埒結びたる、いとみにくくあいなかりしが、ふるびて所々にこはれなどしぬれば、少し気色なほりしやうに思ふもひが心には下露のこぼるるもせずし。ここのみはさらに夏と覚えぬよ。図書館は例のいと狭き所へおし入れらるるなれば、さこそ暑さもたへがたからめと思ひしに、軒高く窓大きなればにや、吹きかよふ風そぞる寒きまでなる、いとうれし。いつきたり

てみるにも男子いと多かれど、女子の闊臨する人おほかたひとりとあらざるこそあやしけれ。それもそれ、多くの男子の中に交じりて、書名を書き、号をしらべなどしてもて行きたれば「違ひぬ。今一度書き直しこよ。」と言はるれば、おもて熱くなりて身もふるへつべし。ましておもて見られ、ささやかれなどせば、心も消ゆるやうになりて、しとど汗におしひたされて、文取り調ぶる心もなくなりぬべし。今は代言試験も近づきころなりとかにて、法律書取り調ぶる人いと多かりき。思ふままの書借りえて読むと読むほどに、長き日もはや夕暮れになりぬべし。園の梢にひぐらし声高鳴きて、入谷のかねかすかにひびき、窓にさし入る夕日のかげ少し薄くなりぬ。おどろかされて室をいづれば、おほかた人も帰りにつけり。書を返して門を出づれば、からすのうち群れてねぐらへかへるかげさへ見えそめぬ。母君の、けふは早く帰りねよべよすがらねむらざりしに身もつかれなばかひなからんとて、かへすがへす仰せられしを忘れしならねど、いといとおくれにけり。いざや近道をととりて谷中より帰らんとて来る。西日やうやうかげろひて紅の色をばかり残して、あすも晴れよとうなる子がうたふ声も、道いそぐ身にはあわただしく聞えぬ。床机といふもの表へならべて、あらひたるゆかたののりこはげなるを着て、うちはもてむねのあたりあふぎあるは、今行水とりたるなるべし。十ばかりの女の子が白きもの所まだらにつけて、三つばかりの子の汗ほなどできたるにや、かしらばかりいと白くしたるを背負ひありくもをかし。片町といふ所の八百屋にあかきが見えしかば、みやげにせ

んとて少し買ふ。道をいそげばしとど汗になりて、目にも口にもながれいるを、ハンケチもておしぬぐひおしぬぐひして、はては少しいたくさへなりぬ。日は薄くらくなりたれど、人の見るらんわづらはしくて、かさはなほかざしたり。家に帰れば、母君は外に出て待ちたまへり。妹は夕げのまうけいそがはしくしゐたり。「ただ今まかり帰りぬ。」などいふはしに、「いざ帯とけよ、衣ぬげよ、暑かりしなるべし、つかれつらめ、湯もわきてあればあびてこよ。」と、残るかたなくのたまはするに、かたじけなくもうれしくも覚えて、汗の麻衣ぬぎ捨て、ゆあみて上がれば、あらひ衣の白きを出して、「るすのまにこれあらひておきぬ。着かへよ。」とのたまふ。夕げいざとてすすめらるるに、すきたる腹の長き道を回りきぬればいとどしくうゑたるには、いづれも美味ならぬはなくて、うちくつろぎてたうべ終はりぬ。

(樋口一葉全集)

「蓮の香」資料(プリント)

○ 日記に見られる、図書館に行った日

(1)	明治 24	6	10
(2)	〃	〃	19
(3)	〃	〃	29
(4)	〃	8	8
(5)	〃	9	15
(6)	〃	〃	26
(7)	〃	10	20

(8)	〃	〃	〃
(9)	〃	25	〃
(10)	〃	1	11
(11)	〃	2	〃
(12)	〃	3	〃
(13)	〃	4	〃
(14)	〃	7	〃
		21	20
		22	28
		17	13
		8	〃

(15)	明治	25	7	22
(16)	〃	〃	〃	〃
(17)	〃	8	3	27
(18)	〃	9	16	〃
(19)	〃	〃	17	〃
(20)	〃	10	21	〃
(21)	〃	3	2	〃
(22)	〃	4	14	〃
(23)	〃	10	2	〃

(24)	〃	〃	〃	4
(25)	〃	〃	〃	5
(26)	〃	〃	〃	6
(27)	〃	〃	〃	7
(28)	〃	〃	〃	8
(29)	〃	11	〃	4
(30)	〃	〃	〃	6
(31)	〃	〃	〃	11

○ 課題

九月はじめの七日ばかり、母君浅草なる三枝殿におもむき給ふ。よからぬことども、かきなりて、こころざすことはならず、願はしきことは遠くて、いとせんなきに、家はいやまづしにまづしく、妹は日ごろなやましようして、うちふし居るなど取つづくるにて、こがね少しばかりからばやとてなりけり。ひるすぐるも帰らせ給はず、三時なるに、かへらせたまはぬは、なぞの故ぞ。花につく世のならひなるに、かく落ちはふれて、かかることいひ行きたりとて、誰かは、ものがたらひ合せだにやはする。いふかひなきに、いづくをかなほもとめ給ふにやなど思ふも、いと、むねいたし。とあるにつけ、かかるにつけ、身の、いと、かひなきななげかはしくて、いづらな、その身は女といふとも、はやはたちともなれるを、老いたる母君一人をだに、やしなひがたきなん、しれたりや。わが身ひとつのゆゑなりせば、いかが、いやしき折立ちたる業をもして、やしなひまゐらせばやとおもへど、母君は、いと、いたく名をこのみ給ふ質におはしませば、兎、塵業をいとなめば、われ死すともよし、

○ 日記の標題と製作年月

- (1) 身のふるごろも (20・1月〜8月)
- (2) 日記無題 (21) ?
- (3) 日記無題 (22・7〜8)
- (4) 日記無題 (23・1〜3)
- (5) 若葉かけ (24・4〜6)
- (6) 若艸 (24・7〜8)
- (7) 筆すさび (24・6〜9)
- (8) 窺生日記 (24・9〜11)
- (9) よもぎふ日記二 (24・11)
- (10) 森のした艸一 (24・11)
- (11) につ記一 (25・1〜2)

われをやしなはんとらば、人め、みぐるしからぬ業をせよとなんのためふ。そも、ことわりぞかし。わが兩方は、はやく志をたて給ひて、この府にのほり給ひしも、名をのぞみ給へばなりけぬ。さるを兄君うせ、父君ゆき、やうやう人には、あなづられ、世にはかるしめらるなど、いかが心くるしやるべきことをと思ふも、かなしう思ひつづくるほどに、四時といふころ帰宅したまひぬ。

〔筆すさび一〕

- (12) につ記二 (25・2〜3)
- (13) 日記 (25・3〜4)
- (14) につ記 (25・4〜5)
- (15) 日記しのぶぐさ (25・6)
- (16) しのぶぐさ (25・6〜8)
- (17) しのぶぐさ (25・8〜9)
- (18) 塵塚の一 (25・9)
- (19) につ記 (25・9〜10)
- (20) 道のしはのつゆ (25・11〜12)
- (21) よもぎふ日記 (25・12〜26)
- (22) よもぎふ日記 (26・2〜3)

- (23) よもぎふにつ記 (26・3) 4
- (24) 蓬生日記 (26・4) 5
- (25) しのぶぐさ (26・4)
- (26) やたらづけ (26・4)
- (27) 蓬生日記 (26・5)
- (28) につ記 (26・5) 6
- (29) 日記 (26・6)
- (30) につ記 (26・7)
- (31) 塵の中 (26・7) 8
- (32) 塵中日記 (26・8) 9
- (33) 塵中日記今集 (26・10) 11
- (34) 塵中日記 (26・11)
- (35) 塵中日記 (26・11) 27・2
- (36) つゆのしづく (27・1)
- (37) 日記ちりの中 (27・2) 3
- (38) いはでもの記 (27・3)

- (39) 塵の中日記 (27・3)
- (40) 塵中につ記 (27・4) 5
- (41) 水の上日記 (27・6) 7
- (42) 水の上 (27・11)
- (43) しのぶぐさ (28・1) 2
- (44) 水の上日記 (28・4) 5
- (45) 水の上につ記 (28・5)
- (46) みづのうへ (28・5)
- (47) 水の上 (28・5) 6
- (48) さをのしづく (28・10)
- (49) 水のうへ日記 (28・10) 11
- (50) 水のうへ (29・1)
- (51) みづの上 (29・2)
- (52) みづの上日記 (29・5) 6
- (53) みづの上日記 (29・6) 7
- (54) みづの上日記 (29・7)

およそ以上のとおりであって、教科書は『文章の流れ』という單元名のもとに、「小園の記」「蓮の香」・「夏から秋へ」・「武蔵野」そして「文語文」の順に掲載されているが、(四)の目標を達成しやすくと思い、(六)のごとき指導計画で学習を進めつつ、たまたま「蓮の香」を取り扱うことになった。

しかも、中学校・高等学校合作での研究会という性格上、両者の参加者があるので、一年生を選んだのであるが、四月入学以来二か月余を経過したばかりであり、一年生のはじめという、まだ文語のきまりをかじりかけた生徒に、一葉及び一葉の擬古文体としての雅文をどう与えるべきか。この立場において本時の指導目標を(イ)(ロ)と設定した。しかも本時の中心は(ロ)においていたといえよう。なお一葉の作品は、現行「国語甲」の検定教科書に収められている日記にしろ、小説にしろ、現在の高校生にとっては、その読解は、相当の抵抗があることは事実であるので、本教材を二・三年で扱うならともかく、一年として扱うばあい、いきおいある程度の指導者のリードこそ必要でもあると考える。しかし、この教材は生徒と年齢もへだたない一葉の成長・発展への秘密を解く役割を果たすものともいえ、彼女の熱意と勇氣とを理解させるに足るもので、十分生徒に考えさせるものをもっているといえる。とかく目前の困難や現実の諸条件を避けたところで観念的に論理をあやつりやすい青年期の心理的傾向に対する反省をよびます面がある。そして一葉の、たとえ、擬古文体といえども、生活そのもののリズムが、おのずから文章のリズムと化しているようなこの日記の文体が、尊い文章であることも知らしめ、なおかつ、古い文体ではあるが、それを読解する基盤を与えて、近代文学史上の一つのすい星のごとき存在と

して輝いた一葉のある日の記録を読ませることは、大いに意義あるものと考えた。

要するに、言語表現的にも内容的にも適切な教材であるが、高校一年のはじめとして、ややむずかしいものがあるといえよう。その点、初登攀として、いまだ動かざる車輪の生徒をどのように正しい方向に動かしかめるか、その導火線の教材として、指導者の私がつとも大切なふみこみを要求するものと認識していた。

三 指導の方法と過程

指導過程

段階	学習事項	生徒の学習活動	指導者の活動・評価
(5分) 導入	本時の学習事項を認	○本時の学習事項を確認し、作者の概略を知る	○本時の学習がなめらかに進むように導入する。
(40分) 展開	内容を讀みとる	○指導者の範読を聞く。 ○四場面の分割を考えながら読む。	○範読する。 ○四場面に分割して進行させることを指示し、指名読みをさせる。 ○誤りのない文脈にそった読み方をしているか。
		○内容を、さらに読みふかめる。 ○解釈上の基本的な語句や文語のきままりを理解する。	○四場面を明らかにし、さらに最初の場面を指名読みをさせる。 ○最初の場面を解釈する。

(5分) 整理	次時予告	○作者のものの見方の特徴を考える。 ○文意をいっそうよく理解し、指導者の指名により、解釈をすすめる。 ○図書館で勉強する作者の姿を通して自己を反省してみる。	○説解に役だつことばや、文語のきままりを押える。 ○作者の心情、好みをつかんでいるか。 ○第二場面を指名読みさせる。 ○部分解釈をさせ、補足しながら解釈する。 ○既習事項を十分理解しているか。
	○本時のまとめと次時の学習を知る。	○作者の心情をつかませる、生活態度を考えさせる。	○本時のまとめをし、次時の課題を提示する。

当日、指導案としてあげた指導過程は右のとおりである。以下この過程を、できるだけ具体化して叙述してみたいと思う。

(1) 導入

本時学習前に、生徒に対し、一葉作品を読んだことの経験をもち者（ラジオ・テレビ・映画などのことについてはふれない）を尋ねたところ、わずか二名にすぎない状態である。（二名とも「たけくらべ」）この学年は、比較的読書量の多い方と観察していたが、一葉についての実態はこんなことである。これを反映して生徒既存の知識を發表援用するといったことはできがたく、そこで、指導者は、時間配当二時間という制約をふまえつつ、本教材と直結させる一葉紹介の導入をふりかざした。

すなわち一葉は、明治の紫式部などといわれている女流作家であつて、明治二十九年二十五歳という若さで世を去つたが、二十四年二十歳の時「枯尾花」という作を書いてから、死去するまでの六年、作品もわずかにすぎないけれども、二十八年には、「にこりえ」「たけくらべ」を公にし、このころになると、一葉の前に一葉なく、一葉の後に一葉なしともいわれる明治の文学史上ユニークな傑作を残した。なかでも文豪森鷗外は「たけくらべ」を激賞し、「われはたとひ、世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでも、此人にまことの詩人といふ名称をおくること惜しまざるなり」といつているほどである。これから読む日記の二年前に父が死に、遺族は家長一葉と母妹の三人となつたが、生活はますます苦しくなる。二十四年の春には作家として家計を補おうとして半井桃水の指導を乞うた。ちよろど、このころは、作歌と小説習作との間にいたのである。そして、近年、一葉の日記は創作以上に高く評価もされているなどと説明し、指導者は、彼女がすぐれた作家でありえた原因として、次の三つを板書した。

1 天分

2 なみなみならぬ努力

3 幼時からの貧乏の中の苦勞

こうして「天才とは努力の別名だ」という諺を見せつけられる思ひのすることを述べて展開にはいつた。

(2)展開

ここでは「読ませるよりもまず読んでやってイメージをつくる」ことを考え、指導者の範読を冒頭に押し出した。(後で石井庄司先

生の御教示によると五分二秒かかった由である) 範読の途中においても誤読のおそれのあるところは、再読して注意を喚起した。たとえば「うちちもてむねのあたりあふぎふるは」「夕げのまうけ」「あらひ衣」「たうべ終はりぬ」などである。

次にこの日記が四場面——①図書館に行くまでの風物に対する感懐、②図書館での一葉の様子、③帰途における一葉の感じ、④帰宅後、家族の心づかいと一葉の感懐——にわけて考えたく、それぞれがどこからどこまでであるか考えながら読むことを指示して、指名読みにはいる。なお生徒には、本単元の学習はとにかく辞典を引くことになれることを最大の目標とすべく進んできており、生徒も相当辞典を引くことに興味をもっている事実をふまえて学習を進めているのであるが、本時の通読も多数の参会者にもおしげよく読んだといえるかと思う。この指名読みのほあひも、指導者は成績の中またはそれ以下のものを指名することとした。この段階の生徒はやはり指導者の再読したあたりには読みにひっかかりを感じて読んでいた。場面設定については、もたつくことなくすらすらと決定をみたので、第一場面を、再度、指名読みさせ終わって第一場面は指導者が解釈・説明などを進めた。

指導者の解釈に当たっては、「一枚たのまる」といった表現が、今日で散見することを自覚させ、当日の朝刊に、たまたま「巨人連敗を免る」といった見出しのあったことなどを持ち出したりした。

また、

「腹痛たへがたければ」

「九時ごろなりしかば」

「所々にこはれなどしぬれば」などを説明し、

「さらに夏と覚えぬよ」を押えたり、「清少納言がいひけん夏の柳」については、

子泣かむ

子泣くらむ

子泣きけむ

を提示して新出助動詞の解釈を示したり、「岸になびくかげ」「夕日のかげ少し薄くなりぬ」(第二場面)「ねぐらへかへるかげさへ見えそめぬ」(同上)の「かげ」を確認してみたり、とくに「をかし」「にくし」そして「あいなし」の三語には意を用い、説明を施した。たとえば、「明け渡る風に葉うらのかへりて見ゆるもをかし」については、大略、△この日記の文章で、現代も使用するもの古今意味を異にすることは、とくに注意してほしいものは、この「をかし」と「おほかたひとりもあらざることあやしけれ」「おどろかされて壺をいづれば……」の三語である。「をかし」については、作者と対象との間に、いわば一定の距離を保って、これを批判的にみる眼が動いている。そしてそこには、作者の知識とか教養を必要とする。ばあいによっては、作者はむしろ一段高いところから、対象を見おろして批判する。そして作者の心が動いた時、「をかし」と評しうる。だから作者の批判に堪えて、これは味わうべきであると感じられる時も、批判の結果、非常識である、不合理である、まちがいである、笑うべきである、と思われる時も「をかし」である。そして擬古文体としての一葉は平安時代の作風であるから前者の用法をまねているといえるけれども、鎌倉時代以後のものはむしろ、後者のばあいとなり、私たちの使う「おかしい」につながってくるといえる。Vといった説明のしかたをして、さらに、「ひ

ろごりたるはにくし」の「にくし」については、『日本語の年輪』(大野晋氏)の△……平安時代になると、「枕草子」に「にくきもの」という段があり、数多くの「にくきもの」があげてある。急ぐことがある折りに来て長話をするお客。(中略)これらを見ると、平安朝の宮廷の女の人たちが、どんなことをにくらしく感じていたかが知られる。しかし、ここで気をつけなければならないのは、「にくし」とか「にくむ」とかいう感情は「きらい」だと突き離し、切りすてるものではないことである。(中略)愛情の裏打ちなしには「にくし」は生まれてこない。いってみれば「にくし」は何処かで相手を許している。V (33ペー) (38ペ)を引用し、敵味方となつてにくみあつてるといった今日の感覚ではなく「岸になびくかげもすずしく、まして……」と流れていることを説明したりした。

かくして、その間、

○一葉と師の君との関係はどうであつたのか。師の君とあるから師弟関係ということはわかるが、それだけではないということほどこでわかるか。

○では、一葉はなぜそのようにしなければならなかつたのか。また、一葉のどんな心情がくみとれるか。

○「蓮根取りの舟つなぎたる、これのみはあらずもがな」は批判精神の表われているところであるが、なぜこう思ったのか。その美意識について君たちはどう思うか。

○「競馬の埒結びたる、いとみにくくあいなかりし」と断定した作者には、どういふ気持ちがあつたのか。

○ところが「……ふるびて所々にこはれなどしぬれば、少し気色な

ほりしやうに思ふもひが心にや」を「……思ふ」で切らず「思ふもひが心にや」と書いているところに、一葉のどんな性格を考へることが出来るか。

こうした問いかけを出したが、最後の発問は、生徒全員の理解に達するには、いささかむずかかったようであり、ここで指導者は十分な共同思考の形に発展させねばならず、またそうしなかったが、指導案にしばられておよその解答のたところを先を急がざるをえなかったことを遺憾に思っている。

以上のような展開を経て、指導者は、一葉がなだらかに細く流れゆく文脈とともに、平安貴族好みの面影をとどめつつ、みやびの伝統を愛し、その観点から明治二十年代初期の東京の風物を描き、しかも勝気なくせに冷静な反省心を持っている彼女の性格の一端に迫らせようとした。しかもこれは、生徒が「たけくらべ」などを読む時への基盤ともなろうと考へたが、どこまで盛り上げえたかは前述のとおり疑問である。

続いて第二場面の指名読みにはいり、部分解釈をさせ、補足しつつ文意をつかむことで学習を展開。これに当たっては、本単元最初から学習してきた、とくに助動詞・助詞・接統詞の復習確実化に意を用い、また、第一場面における指導者の解釈とも十分関連をもたせたいと配慮した。たとえば第一場面でもふれたことの肉づけとして、

「もて行きたれば」

「言はるれば」

「ささやかなれなどせば」を説明させたり、「からすのうち群れてねぐらへかへるかげさへ見えそめぬ」の「さへ」など発問した。

次いで指導者は、「いつきたりてみるにも男子いと多かれど、女子の閲覧する人おほかたひとりもあらざるこそあやしけれ」の部分について、準備資料のプリントによる「日記に見られる図書館に行った日」を参考としてまず提示し、生徒自身の生活と比べることにしている。生徒はこれによって一葉が二年半ほどの間に三十一回プラスXという驚異に値する図書館通いの事実を時代的背景などを考慮に入れて認知することにさせた。さらに「あやし」の語義から展開して、当時の異様は一葉の普通であったのであり、時は明治二十年代、この時にたとえ貧乏で書物が自由には求めえぬ環境とはいへ、敢然として出かける一葉の「積極性・熱意・勇氣」といった生徒の答えたこのうけとめを板書し、第二場面をとおして、勉勵によって人間形成をなし遂げようと努めてやまない一葉の強くして新しい個性のにじみ出ていることを、くみとらせて本時展開の結びとした。

(3)整理

時間の関係上「展開」の終わりを急いだため整理を十分とまでするにいたらなかったが、導入でしるした一葉のすぐれた作家でありえた三項目の板書と、第二場面にみる一葉の「積極性・熱意・勇氣」といった生徒のうけとめ方を照応せしめ本時のまとめとし、さらに明治二十四年当時の貧しい生活の表われている日記として資料プリントの文章を読解してやることを課し、本時を閉じた次第である。

四 反省及び「現代国語」としての所感

前述もしたとおり、高校一年にとっては、いわば初登攀ともいべき教材であったため、経験の想起といったことは考ええないものであり、どうしても指導者の説明的形態が主となったことは不本意ではあったが止むをえなかったものである。と同時にこの段階では、生徒の十分な家庭学習への指導助言の徹底を期しながら、かかる形態をとることも全く無気力なものとは思わずに、能う限り能率的に押さえるところは押さえて進めてみたかったのである。したがって大綱を指導案のごとく予定し、その順序によって活動を展開させつつ、語義などもたち入りすぎたかもしれないが、指導者として、これからの古典に親しむ面を醸成したく叙上のような説明を施した。そしてその過程で、対象の変化や動きにマッチした展開を計り一葉の性格の一端にもふれ、明治という胎動期の息を吸った人間であることを認識させようとした。だから全体的な感想発表などは第二時限の終わりに入れるべく予定していた。

しかも展開中に入れた指導者の留意点などは、古文的文章指導における国語の能力の重点的な指導として、指導者はその初期においては、およそ

- ① 読みなれる
 - ② 辞書を十分利用する
 - ③ 大意・文脈をとらえる
 - ④ 文体の違いを理解する
 - ⑤ 文章に即して理解・鑑賞する
- といったことに重点をおいて、親しみをもちた学習を進めるように平素心がけているが、本時がそれを十分に果たせたとはいいがたい未熟なものであったと反省している。

なお、この授業には、私として古典と現代文との中間的な文とら扱ったらいかにというねらいもあつたのである。

最後にこれらについて簡単な感想を述べて結びとしたい。

私は新指導要領の考え方を全面的に受け入れ、今後の高等学校の国語科は「現代国語」が中心であると自覚し、しかもその「現代国語」の発達の足りなさを補つてもっと発達させる一つの原動力に古典をするんだ。……したがって昔のように古典が国語教育の最終のものだという考え方は、つまりはそれを古典へVという言葉で、いうのですが、A古典へVという国語教育はこれは適当じゃない。つまり古典絶対主義はまちがいだ。(中略)あくまでも現代の言語生活や言語文化を営むのに欠くことのできない国語力が中心で、その国語力を養うために現代の基礎としての古典というものを学ばなければならぬし、それからまた現代からさらに来たるべき言語文化創造への原動力として古典から吸収しなければならぬ、そういう意味でこれはA古典へVの意味の古典の学習じゃなくて、A古典からVの古典の学習、そういうふうな位置づけでやるべきだ。そういう点で、ただ古い、完成したものを尊重するための古典じゃなくて、古典の中に一つの新しい発展を可能にする原動力を発見するためにあるんだ。……」(座談会『現代国語』の座標における西尾実先生のことば)ということばをふまえるとき、新指導要領「現代国語」の(読むこと)の(3)のA「教材は、明治以降のものとし、生徒の理解や興味、関心や、現在および将来においての必要などを考慮して、適切で価値のあるものを広く選ぶ。……」およびその項の解説書(34ページ)には「古典としての古文は原則として江戸時代までとし、明治以降のものを『現代国語』の教材として扱ふこととし

た。」とあり、さらに「明治までさかのぼったのは、明治の文章は現代の文章の直接の源流をなすこと、また、明治時代を近代日本のいい明期と考える常識的な見解に従ったのである。」とある。そして、中学校では、指導書36べに「古典は、(中略)時代的には、明治のものまでも含めている」とある。もっとも高等学校「古典」の方は「原則として」とあって、場合によっては、明治まではいってよろしいという諒解とこのことを聞くわけである。いちおうこの一線は諒解するとして、本教材も、当然「現代国語」の領域であるとなる。

ところで、ここで私の思うことは、中学校の新教科書、そして来年度から実施されようとしている高等学校の新教科書についてである。中学校は、種々の困難さを認めるとしても、高等学校における明治期の教材としての取り扱いがこれよいかということである。新指導要領で、恐れられたことの一つが如実に、教科書という現実となつて表われたことは大方の認めるところであると思う。もちろん、一葉の文章の低学年への提出などについては問題もあらうと思う。しかし「近代のいい明」とうたう人々の文章を無視してほしくはない。極言すれば、昭和二十二年文部省発行の「高等国語一」というあの粗末な教科書ではあるが、内容的にみて、私には考えさせられるものをもっているような気がするのである。興隆期の明治時代、近代の出発点としての明治時代こそ、次代を背負う青年の共鳴共感をよぶものを温存していることに注目したく、古典においてその第二流的なものを入門的教材として提出したりするよりはもっと現場人であるわれわれも新指導要領実施以後の発生しようとしていく一つの盲点への研究を中学校高等学校ともども忘れてはならない

と感ずるわけである。

(昭和37年10月稿)

(付記)

この研究授業にあたっては、指導講師の石井庄司・弥吉菅一両先生をはじめ竹内徹・中西昇両先生などからご指導ご高評をいただきましたことにあつくお礼を申し述べます。

(大阪学芸大学付属高等学校天王寺校舎教諭)